

---

# 古典籍総合データベースの構築と展開

松 下 眞 也

---

## 1 はじめに

早稲田大学図書館では、2005（平成17）年度より、所蔵する和漢古書ならびに貴重書約30万点を対象とするデータベース構築事業に着手した。本事業全体を「古典籍総合データベース」と名づけ、和漢古書・貴重書の書誌目録および全文カラー画像の作成・公開を目的としている。2005年12月に専用ポータルサイト<sup>(1)</sup>をリリースし、まずはじめに「洋学（蘭学）コレクション」を公開した。

いわゆる文化遺産をデジタル・データベース化してネット上に公開し、一般の自由な利用に供するということは、今日、世界的にひろく見られる傾向である。書物の分野においても例外ではない。伝統的な学術・文化の記録媒体として、長い間書庫の中に厳重に保存されてきた数多くの古い貴重な書物のオリジナル画像が、あらゆる人に随時閲覧され享受されうようになるということは、インターネット時代になってはじめて可能になったことであり、学術研究や教育の上に大きな利便性をもたらすであろうことは論をまたない。

本稿では、一部同時進行的なレポートとなるが、早稲田大学図書館における古書・貴重書の歴史と特徴、それまでの組織上の位置づけ、さらに「古典籍総合データベース」の構想から準備作業、大学内における意志決定と人事組織、業者選定、入力基準・作業手順の決定、事業着手から公開にいたるまでの経緯を簡単に報告したい。

## 2 古典籍の管理と運用

「古典籍」(こてんせき)という言葉は意外にも近代の造語で、『大言海』はむろんのこと、『広辞苑』にも『日本国語大辞典』にも、採録されるに至っていない。また中国語でもない。これは、おそらく漢語の「典籍」に古書の「古」を冠した言葉で、おもに日本の古書業界で使われはじめた言葉であろう。

反町茂雄はつぎのように書いている<sup>(2)</sup>。「古典籍は筆写本と、印刷本とに二大別されるが、日本のものについては古写本(寛永以前。古写経も含む)・写本・名家自筆本(書簡も含む)・古版本(慶長・元和以前)・江戸時代の版本・古文書・古地図等のジャンルに分けて考えることも出来よう。」

要するに、内容の優れた古書、貴重かつ稀覯な図書を古典籍と称しているようだ。室町時代以前の古版本・古写本などはどんなものでも当然貴重であるといえるが、たとえば江戸時代の版本といっても、草双紙のようなものは、その範疇に入っていない。

国文学研究資料館編の『古典籍総合目録』が刊行されたのは平成2年(1990)であるが、近年では、「古典籍」という言葉には、従来古書業界で呼びならわされてきたこの言葉にまつわる稀覯性や文化財としての価値といった意味はいぜんとして影を落としてはいるものの、その内容は変質してきているように思われる。優れた古書(版本・写本)をのみ古典籍と称するのではなく、明治以後の活版洋装本に対して、木版和装本および線装の写本を、一括して古典籍と呼ぶようになってきている。すなわち、学術的価値をもつ文字どおり古い典籍を古典籍というのである。

早稲田大学図書館では、1991年の中央図書館竣工・開館以前には、貴重本と目される図書については、鍵のかかる「特別書庫」に収納保管し、「特別図書」もしくは「特別資料」という呼称を与えていた。まさに特別扱いの図書、一般の図書と区別して特別に保管運用に留意すべき図書という意味である。しかし、一方では、閉架式だったこともあるが、たとえば江

戸時代の版本などの多くは特別図書ではなく、洋装の一般図書とともに普通書架に排架され、館外貸出しの対象ともなっていた。

1991年までに普通書庫の中にある和装本・唐装本を抜き出して別置し、中央図書館4階に新たに設けた「古書資料書庫」に排架した。また、それまでの「特別図書」は、特に環境条件を厳重に保つ設計のもとに新たにつくられた「貴重書庫」に移行した。といっても、旧館時代の特別図書のすべてがそのまま「貴重書」になったのではなく、ある程度の調整と選別は行われた。

「貴重書」の指定基準は以下のようなものであった<sup>(3)</sup>。

#### 早稲田大学図書館貴重書指定基準（抄）

早稲田大学図書館においては、以下の各項に該当する図書・資料を「貴重書」に指定し、特に厳重な保存管理上・運用上の措置を施すものとする。（略）

##### 1. 和書

- イ 元和（1623）以前に刊行された版本
- ロ イ）以後に刊行された版本のうち特に稀覯な図書
- ハ 元和（1623）以前に書写された古写本
- ニ ハ）以後の写本のうち特に貴重と認められる図書
- ホ 名家自筆本・名家手沢本（自筆稿本・書入本・手写本・手校本・手識本および旧蔵本・書簡等）
- ヘ 慶應4年までの文書・記録、および明治以降の文書・記録のうち特に貴重なもの
- ト 古地図類（慶應4年まで）
- チ 錦絵（明治初年まで）
- リ 保存・管理上特別な扱いを要するもの（例えば、発禁本など）

##### 2. 漢籍・韓本

- イ 明朝まで（1615）に刊行された版本
  - ロ イ）以後に刊行された版本のうち、特に稀覯な図書
  - ハ 明朝以前の写本
  - ニ 清朝以後の写本のうち特に貴重と認められる図書
- （ホ、リ 和書と同じ）

上記基準のうち、「特に貴重と認められる」という条は客観的基準とは言いがたいにもかかわらず、不可欠なものである。ものの価値とは人間が対象物を評価し付与する属性に由来するから、つねに相対的なものである。学術的価値、文化財としての価値の大部分は稀覯性、時代の古いこと、資料としての正統性、完全性などに求められるが、それだけでもない。

1980年代後半から本格化した所蔵図書の電子目録化の中においては、和書の遡及入力が行われたが、上記貴重書・および和漢古書の目録については対象から外れていた。

この理由としては、おおよそ、

活版洋装本を想定した電子目録の入力規則に和漢古書・貴重書は適合しない

タイトル・著者名その他に頻繁に用いられる旧漢字・異体字などが電子目録上で表現できない

一般の洋装本に対して利用度が少ないので緊急の必要がなく、従来のカード目録で十分用が足りる

入力・点検を担当しうる人材の余裕に欠ける

というような事情があったと思われる。しかし、そのままではよいと考えられていたわけではなかった。貴重書・古書の目録を電子目録に搭載することは、利用者からの要望も多く、長い間懸案事項とされ、将来実現すべき業務目標の一つとされてきた。

従来、貴重書・古書の整理に用いられていたカード目録用の規則は、いたって簡便なものであった。それはおおむね、書名(タイトル)を主標目とし、それにヨミをふり、他には著者名、冊数、装丁・大きさ、刊写の別、刊年月、旧蔵者などが採録されていたが、出版地・出版者はかなり近年まで採録されていない。記述は簡潔であるが、綿密な規則に基づいているとはいえず、またすべての項目をみたしているわけでもなかった。たとえば出版者について採録されるようになってからも、巻末に記された書肆のう

ち筆頭に出ている書肆を採り、「外何軒」などとする傾向が見られるが、適切とは言いがたい。明治以降、代々の図書館員によって書きつがれてきたカード目録は、良くも悪くも歴代の担当者の個性が反映して、省略や恣意的な記述、あきらかな誤謬も散見され、けっして使い勝手のよいものとはいえなかった。

つとに学内外の研究者からは、「貴重書目録」もしくは「特別資料目録」のようなカタログの作成を懇請されていた。貴重書のうち特殊コレクション（洋学文庫、西垣文庫、本間久雄文庫ほか）については個々に印刷目録を刊行してきたとはいえ、現在でもなお、早稲田大学図書館の所蔵する貴重書・古書の全体から資料を探すためには、中央図書館4階の特別資料室に足を運んでカード目録を引くしか手段がない。しかし印刷目録という形でなく、WINEの中でほかの所蔵資料と同じように検索できるようになることが望ましいのはいうまでもない。

貴重書・古書の保存管理、運用についても、伝統的な方法をひきついできたが、それは利用者にはきわめて不評なものであった。閲覧、複写に関して、すべて図書館長の決裁（実際には担当管理職の代行決裁）を得るための申請手続きが要求される。これは現在でも基本的には変化はなく、また早稲田大学図書館だけのことではなくて貴重書を所蔵する図書館であればどの図書館も同様であるはずであるが、利用者の中には、このような煩雑な申請方法を「閉鎖的」と評し、苦情をのべる人も多かった。

むろん、ただ嚴重に利用を制限するだけでは、せっかくの貴重な資料を所蔵している意味がない。早稲田大学図書館では過去さまざま方法で「文化財としての貴重資料の公開」につとめてきた。

手始めはマイクロフィルム化である。すでに昭和43年（1968）に、株式会社雄松堂書店と契約して、「大隈文書」全巻をマイクロフィルムに撮影し、その頒布を開始した。当時あっては、貴重な資料の保存を計り、かつ、利用の便を提供するために、マイクロ化は最良の手段であると考えられていた。国立国会図書館と競うような形になったが、昭和63年（1988）には、

明治期刊行図書のマイクロフィッシュ化という事業にも手を染めている。

複製出版もいくつか行われた。昭和51年（1976）にボアソナードの『日本帝国刑法草案』全巻を撮影し、4分冊として早稲田大学出版部から刊行したのが最初である。これは「早稲田大学図書館資料叢刊」と名づけられ、のちに昭和59年（1984）からの「早稲田大学蔵資料影印叢書」の刊行のさきがけとなった。「早稲田大学蔵資料影印叢書」は学内に刊行委員会を組織し、図書館および演劇博物館の所蔵する貴重書を選び、全巻撮影して影印出版した。国書編3期48冊、洋学編18冊を刊行している。

マイクロ化にせよ影印出版にせよ、貴重な資料の公開という点では大変意義のある事業であるが、共通した欠点がある。それは紙に印刷された画像がモノクロ（白黒）であるという点である。また、いわゆる学術出版であるため刊行部数が少なく、価格も高く、ひろく行き渡るといには限界があった。

1990年代末からの急速なデジタル技術の進歩とインターネット環境の整備は、これまでの図書館業務のあり方を根底から変えたといつてよいだろう。貴重資料の公開という点でもそれはいえる。デジタル・アーカイヴという方法が、複製出版やマイクロ出版による資料公開の方法にくらべ、格段にすぐれていることは論ずるまでもない。

よい例が展覧会業務である。これまでは、準備に長い時間と人手をかけ、充実した展覧会を行っても、会期が終われば跡形もなくなり、残るのは展示目録・図録のみであった。しかしインターネット環境が整備された後には、展覧会に出品した資料の画像を用いて、Web上でつねに観覧可能なバーチャル展示会を提供することができるようになったのである。

早稲田大学図書館では実際に、ホームページ上に《WEB展覧会》というページ<sup>(4)</sup>を設けて、年間3～4回ずつ開催する展覧会出品資料の画像を公開している。新たな企画を実施するごとにコンテンツが年々充実している。そこに収載した資料一点一点は、Google等の検索エンジンにより容易に検索できるため、ひろく一般からのアクセスや問い合わせ、利用のための照

会などのメールが寄せられるようになった。

所蔵資料の媒体変換のための予算もつくようになり、また、その目的で科学研究費などの補助も受けられるようになった。早稲田大学図書館では、展覧会資料とはまた別に、いくつかのまとまった貴重資料のコレクションを撮影しデジタル化して、コンテンツに加えてきた。

このような時代の流れの中で、早稲田大学図書館所蔵の古典籍（貴重書・古書）の網羅的な電子化と電子目録への搭載が検討課題に上がってきたのである。

### 3 早稲田大学図書館所蔵古典籍の内容と特徴

早稲田大学図書館には前述のように、初代市島春城館長以来100余年の間に収集・蓄積された古典籍資料が約30万点存在する。館蔵貴重コレクションの内容と特徴、その中でもとりわけ重要な資料については、これまでもたびたび紹介されてきた。「早稲田大学図書館紀要」誌上における研究・論考や翻刻などもむろんその重要な一端であるが、全体を概観できる形のものとしては、本学創立100周年の際に図書館において編集刊行された『貴重書展図録』<sup>(5)</sup>、新中央図書館竣工を記念して刊行された『館蔵資料図録』<sup>(6)</sup>が挙げられる。この二つの図録はいずれも、早稲田大学図書館を代表する貴重図書の写真図版をおさめ、館員が解題を書いたもので、代表的な貴重資料がほぼ網羅的に紹介されている。

《古典籍》といえは通常、漢籍では四書五経をはじめとする經典資料、国書では六国史や八代集など、名高い名著・古典の善本がそろっているべきであろうが、早稲田大学図書館の古典籍コレクションの特徴はそこにはない。田中光頭の寄贈による国宝の唐代写本(『礼記子本疏義』・『玉篇卷第九残卷』)は蔵するものの、宋版・元版の漢籍はきわめて少ないし、六国史や八代集、源氏物語なども一級の写本といえるようなものは存在していない。しかし、貴重な資料がないというわけではない。早稲田大学中央図書館4階の貴重書庫は、珍書・稀覯書の宝庫といってよい。



筆者も依頼をうけて早稲田大学図書館の貴重資料の紹介を試みたことがあるが<sup>7)</sup>、ほぼ全分野にわたる資料のうち、とくに1) 日本近世文学資料、2) 日本史資料(古文書および近代史料)、3) 洋学(蘭学)資料の3部門が質量ともにすぐれているのが、早稲田大学図書館の貴重書コレクションの特徴であると言える。

日本近世文学資料は江戸時代文学資料と言い換えてもよく、井原西鶴、松尾芭蕉の自筆資料を含む浮世草子や俳書、近松門左衛門の浄瑠璃作品、曲亭馬琴の原稿や日記を含む一次資料、合巻・草双紙などをはじめとしてきわめて充実している。これは、東京専門学校に文学科を創設した坪内逍遙や、饗庭篁村などその周囲の人々、文人でもあった初代図書館長市島春城らの努力によるところが大きい。東京大学など官学の文学科ではとりあげられることの少なかった近世文学を学問的にとりあげ研究してきた早





稲田大学の特徴があらわれているといえる。これに対比すると、平安から室町にいたる中古文学関係資料はやや見劣りがするが、近年、和歌文学を中心にすぐれた一次資料が集まりつつある。また明治以降の近代文学資料については、本間久雄や今井卓爾のコレクションをはじめとして、早稲田大学出身作家の作品・原稿などが充実している。

歴史資料はなんといっても重要文化財3点を含む荻野研究室収集の日本古文書コレクションが特筆されよう。名高い『尾張国郡司百姓等解文』(重要文化財)をはじめとする、奈良時代から江戸時代にいたる1100点を越える原文書はそれぞれが貴重な歴史史料であるが、第7代図書館長でもあった荻野三七彦が文学部に職中に、教育・研究上の標本資料として収集したものである。これに田中光顕寄贈の『東大寺薬師院文書』(重要文化財)、大隈家寄贈の『大隈文書』を加えれば、古代から近代に至る日本通史を原

史料でカバーできる。早稲田大学図書館では実際に、《館蔵資料でたどる日本の歴史》という展覧会を構成、実施したほどである。そのほかにも、漂流資料や錦絵、引札、古写真、地方文書など歴史研究を補完する特異な資料に事欠かない。

洋学（蘭学）資料が早稲田大学図書館に集まったのは、実際に長崎でフルベッキに英学を学び、日本の近代化政策を担当した大隈重信が創設した大学であってみれば、当然のことであるかもしれない。大隈はのちに《東西文明の調和》を主張して大日本文明協会をつくり、約260種の欧米の名著を翻訳刊行させる。また大隈のブレンであった市島春城は図書館長時代に《文明源流展》という展覧会を開催し、ヨーロッパの学術を日本にもたらした初期の蘭学者たちの業績を称揚している。実際に資料の収集にあたったのは、自身洋学の研究者でもあった第4代図書館長岡村千曳であり、彼はみずからの収集した資料と、英語学者勝俣銓吉郎の収集資料、さらには、蘭学興隆の祖である大槻玄澤（磐水）の家に伝わる資料などを合わせて、現在の「洋学文庫」の基をつくった。『芝蘭堂新元会図』『杉田玄白肖像』『重訂解体新書』『江戸ハルマ』などを含む「大槻玄澤関係資料」はのちに重要文化財に指定された。

このほかにも、各分野にわたりさまざまな貴重資料がみられる。たとえば、寛永版の『塵劫記』や漢訳のユークリッドの『幾何原本』などを含む数学者小倉金之助の旧蔵書（小倉文庫）のように、まとまったコレクションをそのまま受け入れて「文庫」名のもとに整理しているものも多い。また、洞富雄、柴田光彦など歴代のすぐれた図書館司書による収集資料も数多い。

筆者は以前、岩波書店刊行の「日本近代思想大系」の月報に早稲田大学図書館のコレクションを紹介する一文を載せた際<sup>(8)</sup>、「国宝からチラシまで：Archivesとしての早稲田大学図書館」というタイトルをつけた。評価の定まった名著・古典だけではなく、珍奇で雑多な資料もあわせのむ懐の深さが、早稲田大学図書館のコレクションの最大の特徴であると考えられ

る。

#### 4 古典籍総合データベースの構想

早稲田大学図書館では2004年度から、資料管理課・学術情報課・総務課を中心として、貴重書・古書のデータベース化に向けての検討に入った。

当初は古典籍の目録データを電子目録、すなわち早稲田大学図書館のWINEシステムに載せるということを中心に検討していたため、画像データの位置づけは副次的なものであった。目録をいわば補完するものとして、表紙、見返し、巻頭、奥書など、書誌の情報源となる部分を部分的に画像化することを考えていたが、検討を重ねるうちに、部分ではなく資料全文の画像を収録するべきだという考え方が出てきた。

当然のことであるが、利用者の立場に立った場合、なによりも重要なのは資料の本文であるはずである。部分の画像では意味がない。古典籍を電子目録で検索できるようになることは格段の進歩といえるが、そこから更に、本文の全文画像をみることができれば、遠隔地の利用者をも満足させることができる。利用者の大部分は図書館員のように書誌をとるために資料を見るわけではない。目録とは所在情報であるにすぎない。

ただ全点全文の画像を撮影するとなると経費の面がネックになる。というのも、それまで早稲田大学図書館で資料の電子化のために撮影していた経験からすれば、撮影料金はおおむね高く、貴重書・古書30万点の全文撮影にかかるコストは天文学的数字になるだろうと思われていた。しかしこれも、フィルムによる撮影時代の話であり、刻々進化をとげるデジタルカメラ技術をもってすれば、これまでの常識にないような低コストを実現できる可能性があった。

全文の画像データを搭載するとなるとデータベースの性格は180度変わる。すなわち、より「電子図書館」もしくは「仮想アーカイヴズ」に近づくこととなる。データベースは一般に公開するのが前提であるから、これまで閲覧に厳重な制限を設けていた資料を一挙に全文公開することには慎

重論もあった。たとえば、まず学内環境のみの公開にとどめておき、段階的に一般公開に移行するというような考え方である。

一般に貴重書の画像を WEB で公開する場合つねに問題となるのが第三者による資料の二次的使用である。通常、早稲田大学図書館では、所蔵資料の写真などを図書や雑誌等に掲載したいという申込みがあった場合、館長裁可の上、規定の掲載料金を徴収している。公共の目的を有するものは掲載料を免除することもあるが、申し出て許可を受けなければならないのは変わらない。しかしインターネット上の画像は、しばしば無断で使用される危険性がある。「利用の希望がある方はご連絡下さい」と書き添えてあったとしても無視されることが多い。

「公開」を優先すれば、二次使用、無断使用の問題はかならず発生する。むろんそれは悪用だけとはかぎらない。たとえば、教師が教場で教材・参考資料として使うような場合、いちいち資料の所蔵者に許可を求める必要はない。

検討の結果としては、やはり画像は全文でなければ意味がないという判断に傾いた。これはむろん、先行するさまざまな機関のデジタル・アーカイブを参照した結果でもあるが、また、時代の要求するところを先取りするという意図もあった。これまで、所蔵する古典籍を網羅的に電子化する計画を打ち出したところは、まだ、わが国には存在していない。

最終的に確認した目標は、早稲田大学図書館が所蔵する和漢古書・貴重書の書誌データを作成し、WINE に搭載すること、ならびに同時に全点について全文画像データを作成し、書誌データとリンクさせる、ということ、さらに、それらを公開し、利用しやすいシステムを構築する、ということである。

データベース化の対象とする資料は、貴重書庫収蔵の和漢貴重書全点、古書資料書庫収蔵の和漢古書全点である。なかには、「禁帯出」扱いで貴重書庫・古書資料書庫内保管となっている資料もあるが、WINE にデータが入っていない以上それらも対象とする。ただし、未整理の資料、個人情報

を含んでいたり著作権が残っている資料など一般に公開することが好ましくない資料、および文書資料（地方文書）については、当面对象としないこととした。

この目標を実現するためにはいくつか実際的な問題があった。

作業の具体的な方法としては、データ作成を業者に委託し、早稲田大学図書館がこれをチェックするというこれまで新規受入図書目録作成および遡及入力の際に行ってきた方法が最も現実的である。書誌データ作成が終了した資料を業者が順次撮影し、画像データを作成することになる。

そこで、まず作業を委託する業者を決定しなければならない。業者に対しては委託する作業・業務の範囲を具体的に指定し、確認して、早稲田大学と契約を交わすことになるが、必要に応じて見積り合わせなどをした上で、最も適切な業者を選定しなければならない。

これに応じて、早稲田大学図書館側の体制を確立する必要がある。

データ作成作業を業者に委託するとはいっても、学術的にも奥の深い古典籍のことであるからむろん丸投げというわけにはいかない。早稲田大学図書館の名を冠して作成公開する以上、最終責任は早稲田大学図書館にあるからである。

貴重書・古書は通常、早稲田大学図書館資料管理課に属する特別資料室において管理運用しているので、これらは元来は特別資料室の管掌業務であるともいえるが、事業全体の規模から見ても、一部署の日常業務として処理しきれるものではなく、早稲田大学図書館全体としてプロジェクトチーム体制を組織化する必要があると考えられた。特別資料室担当者、および当該業務経験者を中心に人選しなければならない。

さらに、作業フローの確定と作業環境の整備が必要となる。データベース作成のための作業スペースを中央図書館内に設定し、貴重書庫あるいは古書資料書庫から作業場所に搬出してから書庫に戻すまでの作業の流れ・資料の動線を明確にしておかねばならない。取り扱う資料が貴重書・古書であるため、セキュリティ上万全でなければならないからである。

他機関の遡及入力などの場合には、資料原本には触れず、カード目録や印刷目録からデータを作成するという例も見られるようであるが、貴重書・古書の場合は資料原本からデータをとるのではなければ意味がない。早稲田大学図書館では、かつて和書（明治以後の洋装図書）の遡及入力を行った際も、実際に資料現物を作業場に運び、現物からデータをおこす方法をとった。むろん、カード目録や印刷目録は歴代の図書館員の努力の結晶であり、いわば遺産であって、長い間使用されてきたものであり参考にするべきではあるが、前述したように、データ作成の情報源とするには不備があり、しばしば不適切な記述もみられるためである。

これにともない、実際に作業にとりかかる前に、作業基準を具体的に策定しておかねばならない。ここでいう作業基準とは目録の入力基準、資料の入力順序、撮影と画像データの仕様をいう。

構想がある程度かたまってきたところで、最も大事なこととして、古典籍のデータベース化事業に着手するということへの、図書館内および大学内でのコンセンサスを得ておく必要があった。貴重書・古書の電子目録化および画像の公開ということ自体は、きわめて意義のあることであり、つとに要望されるところでもあったから、図書館内においても大学内においても、強い反対の声はあり得ないと思われたが、事業をすすめてゆく体制、計画についても賛同を得なければ、事業が成立しない。

図書館内では2005年度予算審議の場において、資料管理課から次年度の事業計画として「古典籍データベース化事業」案が提出され、了承された。

2005年3月、大学内の意志決定機関である学内理事会において、紙屋図書館長が事業の構想と概略を説明し、理事会の了承を得た。

これにもとづき、2005年度より図書館内に「図書館蔵古典籍データベース化推進プロジェクト室」を設置することが決定し、学内に広報された。これにより、早稲田大学における古典籍総合データベース構築事業が2005年度からスタートしたのである。同室設置の趣旨として広報された文言はつぎのとおりである。

## 1. 設置の趣旨

本大学図書館が所蔵する約30万点におよぶ古典籍をデータベース化するとともに、そのデータベースに誰もがアクセスできるシステムを構築することを通じ、古典籍を基盤とした研究教育活動の一層の活性化に寄与するため、「図書館蔵古典籍データベース化推進プロジェクト室」を設置することとした。

## 2. 業務の主な内容

古典籍データベース構築事業の企画立案

本大学における既存デジタルアーカイブとの連携

学内外諸機関および諸団体等との渉外および調整

古典籍全般の体系的な保全

古典籍全般の維持および管理に関わる人材の育成

その他目的達成に必要な事項

「図書館蔵古典籍データベース化推進プロジェクト室」は、組織としては、図書館長を室長とし、図書館副館長（2名）を副室長として、その下にプロジェクトマネージャー（担当管理職）を置くもので、2005年4月の人事発令により管理職1名、専任職員3名がいずれも兼務として任命され、作業を開始した。

## 5 作業基準・作業環境

以下具体的な準備項目について概要を記す。

### 5 - 1 書誌データ入力基準

書誌データの入力基準については、資料管理課および委託業者に決定した紀伊国屋書店の担当者により、くりかえし綿密なミーティングを行い、文字コードの問題や具体的な入力項目一つ一つについて検討した。

このデータベース構築のそもそもの構想は、WINE システムの同一環境の中で普通の活字本と同様に古典籍資料の検索も可能にするという点であったので、まず大前提として基本的に WINE 和書の入力基準に準ずることとした。担当者は古典籍の現物資料とカード目録・印刷目録等を照合し、必要に応じて他機関作成のデータを参照しながら記述することになる。

一般に書誌データ作成の必須項目とされるのは、版本の場合、書名、巻次、責任表示、出版地、出版者、出版年、大きさ・装丁、著者名標目などである。必須ではないが、わかれば入れるべきなのが資料の伝来に関する情報で、蔵書印などの印記、旧蔵者なども判明すれば注記する。また、「五山版」「古活字版」「近世木活字版」「丹緑本」などといった、主に印刷形式にかかわる書誌学用語も、あてはまる資料には注記すべきである。

古典籍を電子目録化する場合、避けて通れないのが文字の問題である。当然、現在は用いられることのない旧字体の漢字や、異体字・略字などが用いられている。国文学研究資料館の「古典籍総合目録データベース」を見ると、旧字体の漢字はほぼすべて新字体に置き換えられているようであるが、ここでは、基本的には資料原本にある字体をその通り記すことを原則とし、JIS 第二水準までの漢字に置き換えられない場合のみ [ ] にカタカナで音読みをいれ表記するという方法をとることとした。たとえば大槻磐水（玄澤）の随筆『えんこうまんろく』の「えん」は田へんに宛という字であるが、第二水準までにないので、『[エン] 港漫録』と表記される。

略字・異体字は正字・常用字体になおす。また、変体仮名・万葉仮名は、すべてひらがなにする。

古書の書名のとり方についてはさまざまな問題があるが、基本的に現物資料の巻頭にあるものを採り、巻頭に書名がないか、あるいは不適切な場合、序・扉・版心・巻末（尾題）・題簽などに記された書名をとる。通常、「増補改訂」などの角書・冠称は書名に含まないが、重要文化財でもある大槻磐水『重訂解体新書』のように、資料によっては含ませる場合もあるので、判断に困った場合には『国書総目録』に準ずることとした。



岩波書店から昭和38年（1963）に刊行された『国書総目録』は、戦前企画された『国書解題』の流れを継承し、全国に所蔵される170万余の古典籍国書の総合目録として編纂刊行されたもので、絶対無謬とはいえないものの、書名のとり方や読み方に関しては、まずもっとも信頼のおける標準的典拠と考えられるからである。

出版事項に関しては、版本の場合、何人もの出版者名が併記されていることが多いが、奥付に表示されている複数の出版者のうち最後に記されている出版者、見返しに記されている複数の出版者のうちでは最初の出版者をとるのを原則とした。また、個人名と団体名（屋号など）が併記されている場合は団体名をとる。つまり「須原屋茂兵衛」ではなく「青藜閣」をとる。

出版年は記されたうち最も新しい年を原本の記載通りに記す。つまり、元号を記し西暦を補記する。干支表記のものは元号になおす。出版地もまた、原則として原本記載通りとし、必要な場合説明を補記する。つまり皇都・都・洛陽・京師はそのまま記し、（京都）と補記し、摂陽・浪花・浪速・難波はそのまま記して（大坂）と補記する。

通常の書誌データでは必須とされる分類および件名は付与しないこととした。分類・件名については、作業のスピードアップのため省略したという面もたしかにあるが、現実問題として、古典籍は古典籍独自の分類体系でなければ意味をなさず、件名も同様という判断によっている。

また重要なこととして、同一書・同一版と判断されるものが複数部あっても現物ごとにデータを作成することとした。木版時代の出版物は現在よりも出版部数が少なく、改訂や改版も明記されていない場合があり、また本によって来歴も異なるためであり、印刷された本であっても同一の資料はないという書誌学的事実によっている。

また、写本（書写資料）、変形本（巻物、掛軸、一枚物など）についても、当然ながらそれぞれ固有の問題点があり、検討して入力基準を決めた。これらをもとに、さらに詳細綿密な作業マニュアルを作成し、それにもとづ

いて作業している。

## 5 - 2 画像データの作成

画像データについては、従来いくつか作成してきたデジタルデータをはじめ、貴重書の画像で流用できるものはないかというところから検討をはじめた。

これまで実は、貴重書のかなりの部分はさまざまな目的により、たびたび撮影されている。前述したマイクロフィルム化や影印出版のための撮影、重要文化財などのレプリカ作成、資料図録・展覧会図録掲載のための撮影、出版社等の依頼による書物掲載のための撮影、利用者の複写申し込みに応じた撮影、近年のデジタル・アーカイブのための撮影などである。それらの撮影はすべて、特殊な場合をのぞいて、二次的使用を防ぐ意味からカラーポジフィルムないしはモノクロネガフィルムの図書館への納入を義務づけており、特別資料室にはそれら貴重書のネガ・ポジフィルムが相当な数量蓄積されている。

しかし、それらのフィルムを用いてデジタルデータに変換するとしても、当然のことながら、長い年月の蓄積であるからさまざまにフィルムの仕様が異なり、画質が一定しない。カラー画像とモノクロ画像が混在するのは見苦しい。

検討したが上記の理由により、これまで撮影したものは原則として使用せず、統一した規格ですべて新たに撮影するという道を選んだ。

近年のデジタルカメラの性能は、わずか数年前にさえ想像もできなかったほど、格段に進歩している。ホームページ上で公開するかぎりにおいては、フィルムから起こしたデータと全く遜色はないといってよい。

画質が精細になれば、公開の際、二次使用や無断使用される懸念が生じるが、とってテキストが判読できないというのでは、全く意味がない。通常のデジタルカメラの画像は、江戸時代の木版本などであれば、挿画や地図などに付された微細な文字の振り仮名にいたるまで、とくに拡大しな

くとも明瞭に判読できる。

早稲田大学図書館では、いくつかの業者に同じ条件を示して見積合わせをおこない、担当業者として東京都板橋福祉工場を選択した。提示した業務内容は、貴重書・古書につき年間約48万カット撮影という条件である。これは、約30万冊のうち貴重書全点および古書の相当部分を5年計画で撮影すると仮定して、1冊平均の丁数を勘案して積算した机上の概数である。

撮影は、収差の少ない高性能レンズのついた高画素のデジタル一眼レフカメラを用いる。資料が冊子体の場合は見開きで1カット。冊子体の貴重書には原則として間紙を挿入し撮影するが、古書ではとくに裏映りが激しいもの以外、間紙を入れず撮影する。先頭カットにはカラーチャート、スケール、請求番号を付写する。

画像保存方式はJPEG(圧縮画像方式)およびRAW形式のファイルとし、納品形態はDVD-Rとした。

当初は、書誌データ作成の終了した資料を撮影所に運び撮影することを考えていたが、資料の搬送時などにセキュリティ上不安があると判断し、中央図書館内に写場を設けて、業者がカメラセット等を持ち込み出張・常駐して順次撮影作業を行うこととした。資料を離れた場所に持ち出して撮影するよりも、館内で行ったほうが安全であるし、撮影上の疑点などをすぐ担当の図書館職員に質すことができるので、結果としてはこのほうがよかったと思われる。

### 5 - 3 作業手順

作業手順として、概略以下のような流れを考えた。

搬出 原則として毎日朝、1日に書誌データ入力処理する量の資料を4階の書庫から搬出し1階の作業場所に運ぶ。作業中は入力作業中であるむねを書架に表示しておく。作業中に利用の希望があった場合は、利用を優先する。受け渡しは調査簿等で業者と早稲田(特別資料室)

双方で確認する。資料現物が作業場所にとどまる期間はなるべく短くする。

書誌データ入力 資料現物から書誌をとり入力する。

データチェック 資料現物とデータを照合する。校正がある場合は修正する。

書誌データ入力作業が終了した印を現物のラベルに付し、撮影に回す。

画像データ作成 書誌データ作成が終了した資料を、必要な前処理の後、撮影する。

データチェック 資料現物とデータを照合する。校正がある場合は修正する。

返却 画像データが作成され、チェックの終了した印を現物のラベルに付し、4階書庫の所定の位置に戻す。受け渡しは調査簿等で業者と早稲田（特別資料室）双方で確認する。

実際にはこのフロー通りに流れるということはなく、書誌データチェック待ちの資料が滞留してしまうため、いったん書誌データ作業終了後書庫に戻し、撮影のため再度搬出するという流れになっている場合もある。

## 6 作業計画

30万冊の古典籍をどのような順序で入力作業をおこなってゆくかという問題は、どのような順序で公開するかという問題でもあり、この事業の全体計画と関連する政策的な問題でもあった。

請求記号順に端から、というわけにもいかない。前述したように、早稲田大学図書館を特徴づける古典籍のコレクションは、日本近世を中心とする文学資料、日本古文書を中心とする歴史資料、および洋学（蘭学）資料である。これらを、どの順序で公開していくかというのはなかなか難しい。

結局、検討の結果、他とくらべてきわだった特色をもち、重要文化財も含む洋学（蘭学）資料とその周辺資料からということにした。早稲田大学

図書館の洋学資料は、前述のように影印出版が企画され、18冊まで刊行されたものの、重要資料の全貌を公開するには至らず、途中で途切れた形になっていたからでもある。

ここには大槻磐水（玄澤）や宇田川榕庵ら、江戸時代のすぐれた蘭学者たちの自筆草稿資料が豊富に存し、しかもそれらの多くは、まだ一般の目にはほとんど触れられていない資料である。

以下、おおよそつぎのような順序で入力・公開をすすめてゆくことを決定した。

2005年度 洋学関連資料・自然科学分野のデータベース化

「洋学文庫」（蘭学資料）を中心に科学史関係分野ほかの古典籍  
約50,000点

2006年度 文学・芸術分野のデータベース化

文学・芸術に分類されている古典籍、曲亭叢書（瀧澤馬琴資料）、二葉亭  
四迷資料、および「西垣文庫」（社会風俗史関係資料） 約61,000点

2007年度 歴史・伝記分野のデータベース化

歴史・伝記に分類される古典籍および「荻野研究室収集文書」（日本古文  
書資料） 約65,000点

2008年度 哲学・宗教分野のデータベース化

哲学・宗教に分類されている古典籍ならびに「風陵文庫」（中国民間信仰  
資料）「教林文庫」等 約49,000点

2009年度 社会科学分野のデータベース化

政治・経済・法律・商業など社会科学に分類されている古典籍  
約63,000点

2010年度以降も、新規に所蔵された資料や関連する他の年代の資料などを継続的にデータベース化し、より網羅的に、かつ各主題をより深くカバーするデータベースを構築してゆきたい。



## 7 ポータルサイトの設置

「古典籍データベース化推進プロジェクト室」が設置された2005年4月以降、ほぼ月1回のペースで、館長・副館長以下関係者が集まりプロジェクト・ミーティングを開き、作業進捗状況の報告、目標の確認と問題点の検討、意見交換をおこなっている。

約半年を過ぎて作成されたデータがある程度蓄積されたところで、出来上がった貴重な古典籍のデータを一般市民にどのように見せることができるかということについて検討した。

このデータベースは早稲田大学図書館の OPAC から古典籍も検索でき、さらに古典籍の書誌データ画面に全文画像データをリンクさせているというのが大きな特徴であるが、単に WINE に入っているというだけでは、せっかくの貴重資料の公開もインパクトに欠け、学外者には利用されにくいというおそれがある。そのため早くから、データ公開にともなって古典籍画像のより簡便な検索ができるよう工夫が必要であるということで一致していた。

そこで早稲田大学図書館のホームページの中に、「古典籍総合データベース」の専用ポータルサイトを立ち上げ、そこにさまざまな検索方法を盛り込んで、WINE にアクセスしなくても資料にたどり着けるシステムをつくることとした。

第一弾として公開した洋学(蘭学)コレクションのページ<sup>(9)</sup>には、簡略な「洋学史年表」を提示して、鉄砲伝来から明治維新までの日本洋学史の流れを概観できるようにし、年表にあらわれる『解体新書』『江戸ハルマ』などの書名をクリックすれば、それぞれの資料の画像データに至るというような仕掛けをつくった。また、「主な資料」として資料の画像と解題を展覧会方式でならべて表示し、早稲田大学図書館の洋学コレクションの内容が概観できるようにした。

Google などの検索エンジンを用いても、書名などを入力すれば容易にヒットするので、一般の利用者は、古典籍総合データベースの存在を意識することなく、早稲田大学図書館所蔵古典籍のデータに行き着くことができる。

今後、洋学コレクションのみならず、データが蓄積された時点で、さまざまな興味深いコレクションのページが、これに付け加えられることになる。たとえば「曲亭馬琴コレクション」、「江戸期草双紙コレクション」、「江

戸・明治諷刺錦絵コレクション』、「日本古文書コレクション」などのページが付け加えられ、膨大な量の充実した古典籍資料の画像が次々に検索可能となるはずである。こうした状況は、これまでのわが国の図書館が経験したことのなかった状況であることはたしかであり、教育・研究のすがたを変えてゆくかもしれない。

データチェックのために古典籍の現物資料を手にとり、その一点一点をひもといていると、歴史の重みを実感すると同時に、つねに何かしら新しい発見がある。考えてみれば、われわれ図書館で働く者も、こうして一冊ごとに資料の中身を詳しく見る機会というものほとんどない。歴史の中で書物が果たしてきた役割、図書館が果たしてきた役割もまた、端倪すべからざる重みを持っている。古典籍総合データベースのもつ意味もまた、きわめて重いといえよう。

#### 注

- (1) URL : <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>
- (2) 反町茂雄『日本の古典籍 その面白さ その尊さ』東京 八木書店 1984
- (3) 早稲田大学図書館長期計画委員会 5.5次ワーキンググループ報告書「貴重書・古書資料」早稲田大学図書館 1986
- (4) URL : <http://www.wul.waseda.ac.jp/TENJI/virtual/index.html>
- (5) 早稲田大学図書館編『創立百周年記念 貴重書展図録』早稲田大学図書館 1982
- (6) 早稲田大学図書館館蔵資料図録編集委員会編『早稲田大学図書館 館蔵資料図録』早稲田大学図書館 1990
- (7) 松下真也 早稲田大学図書館の貴重図書(1)(2)「大学図書館研究」72, 73号 2004/2005
- (8) 日本近代思想大系23「風俗 性」月報 岩波書店 1990
- (9) URL : [http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/ga\\_yogaku/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/ga_yogaku/index.html)  
(まつした しんや 図書館蔵古典籍データベース化  
推進プロジェクト室プロジェクトマネージャー)